

新潟日報 2020 年 11 月号 新型コロナ禍のタイ

毎年今頃になると日本の紅葉が懐かしくなる。テレビに写しだされる赤く染まったモミジの葉や、黄色の葉を落としたイチョウ並木を見ると無性に恋しくなる。暑い夏と涼しい夏しか季節がないと、現地人が嘆くここタイに長年住むと、季節の有難さをなおさら感じるようになる。

例年ならば打ち合わせにかこつけて日本に一時帰国するのだが、今年はそうはいきそうもない。2月に成田からバンコクに着いて以来、もう9カ月もタイで半ば軟禁状態に合っている。それでも、タイに残っていたおかげで8月から始まった大学の講義を支障なくこなすことができ、運がいいと感謝すべきなのだろう。

いつも利用していたタイ国際航空は新型コロナウイルスの影響で数カ月前に倒産し、一方的にキャンセルされた航空券の払い戻しのめどは、まだ立っていない。他方、今年の4月にタイに転勤の辞令が出た多くの人や出張予定者たちがいまだに渡航許可が下りず、日本で足止めをくっている。うわさによるとその数が何と何千人にも及ぶという。タイに支店や工場を持つ日本の会社にとっては現場の監督管理が思うようにできず、ずいぶん歯がゆい思いをしているのに違いない。

欧米に比べて新型コロナの感染者が少ない日本が不思議に思われていると聞くが、それに輪をかけて、タイでは政府発表の国内感染者がほとんど“ゼロ”の状態が長い間続いている。どこまで信ぴょう性があるのか、首をかしげるタイ人たちに時たま出会う。タイから戻った労働者たちがミャンマー帰国時の検査で陽性だった、といったニュースが時々耳に入ってくるからだ。

観光立国のタイから観光客の姿が突然消えてもう数カ月が過ぎた。ここバンコクでもあふれるほどいた中国人団体客や欧米からの観光客の姿が消えて観光地はどこもひっそりしている。小さな露店や土産物屋も含めて観光収入を糧としていた人々に及ぼしている影響は計り知れない。休業に追い込まれたホテルがいくつもある半面、赤字を覚悟で開業している五つ星の高級ホテルの多くは通常料金の3分の1ぐらいの宿泊料金を設定して、損をしなくても生き永らえて営業を続け、コロナが収束する時を待とうという作戦のようだ。

10月に入ってから大学生たちが中心になった反政府運動が活発化してきた。若者層を中心に積もり積もった現政権に対する憤りが、皇室に対する不満やコロナ禍でのほけ口の無いフラストレーションと重なり、大きなエネルギーを生んでいるようにも見える。5人以上の集会を禁じた非常事態宣言の中、反政府集会の参加者規模は3万人近くに及び、11月に入るとさらに勢いづく様相を呈している。政府が武力で鎮圧しようとする大混乱になるだろう。ほほ笑みの国タイに、多くの笑顔が一日も早く戻ることを祈りたい。